

---

# SNOW ~ 去りゆく者 ~

夢宮架音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SNOW〜去りゆく者〜

### 【コード】

N1079I

### 【作者名】

夢宮架音

### 【あらすじ】

雪にまつわる短いお話。残された者と対になっています。二つで一つのお話ですが、これ一つでも読めます。

静かに雪が舞い落ちる様をただ意味もなく見つめていた。体はすでに動かない。また、動かす気力もとうの昔に失われていた。痛みも苦しみもなく、感じるのは流れ出る血の熱さと、雪の冷たさだけ。

（泣くかな…あいつ…）

最後まで自分を止めようとしていた少女のことを、ふと考える。意地っ張りで、いつもは嫌味しか言わないくせに自分が戦場に出ると知ると必死になって止めようとしていた。最後には行くなと言って涙まで浮かべていた。結局その涙は零れることはなかったが、今にして思えばあの強気な少女が自分に初めて見せた涙だった様に思う。

（普段からあれくらい素直でいれば良いのに）

自分の考えに笑いがこみ上げてくるようだった。そんな少女は少女ではない。自分が愛したのは誰よりも強気で、意地っ張りで、快活に笑い、傲慢なまでに自分に命令する少女だ。しおらしさなど欠片も持ち合わせていない、そんな気位の高い彼女が好きだったのだ。

降り積もる雪の所為か、視界には一面の白しか映っていない。冷酷なまでの白に嫌気がさして目を閉じる。

最後にこの瞳に写すなら、故郷の麦畑がいいと思った。あの金色の海を、最後にこの目に焼き付けたいと思った。

瞳を開けて苦笑する。

(幻覚まで見え出したか…)

一面に広がる金色。

残光を受けて燃え上がる空。

そこにたたずむ一人の少女。

(……)

小さく名前を呟けば、少女が驚いたように振り返る。

すぐにその顔が笑顔に変わる。

その笑顔を見ると自分が故郷に帰ってきたかのような錯覚を受ける。

少女が自分に向かって走り寄る。

(ただいま)

駆け寄ってきた少女に告げると、泣き出しそうに顔を歪めながらそれでも少女は笑う。

おかえり

少女の告げる言葉が胸に小さな光を灯す。

帰ってきた。

ここに。

少女の下に。

その実感は紛れもない幸福となる。

小さな幸福感は全身に心地よい熱を生む。

熱はやがて睡魔を呼ぶ。

近くの木陰に少女と共に座り込み、襲いくる睡魔に身をゆだねる。  
体が泥のように重く動かない。  
自然とまぶたが瞳を覆う。

……

少女が何かを告げるが、その言葉すら自分の耳には届かない。

(眠い…)

男は眠気に身をゆだねる。

次に目覚めたとき何が待っているのかも考えず、幸福なまま、ただ静かに眠りについた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1079i/>

---

SNOW ~ 去りゆく者 ~

2010年12月28日02時29分発行